

それ以後新しい生活が始まった。……けれども、私はこの物語で不明のまま残されてゐることを説明しなければならぬ。

少くとも私に、その當時、及びその後まで第一の疑問として残つてゐたことは、——ヴァシロフがどうしてラムバート如き人間と行動を共にすることが出来たのか、といふことである。そして又さうすることにして彼の目指してゐた目的は何かといふことである。

私はだんだんに稍々説明し得る境地に達した。——私の考に依れば、但しその頃、即ちその最後の日或はその前位の考に依れば、ヴァシロフは何等明確な目的を持つてゐた筈もない。そして實に彼は事件を少しも考へないで、相衝突する感情の渦巻の影響を受けて動いてゐただと信じてゐた。然しながら彼が實際狂氣したといふ説を私は容れることは出来ない。殊に彼が全然正氣である現在に於ては、尙更さうである。が、その「第二自我」といふやつは疑ふべくもなく認めるのだ。

その「第二自我」を言ふのは正しく言へば如何なるものだらうか？ 第二自我とは、私が目的があつて後に讀んだ、或著名な醫學上の著書に従へば、非常に悪い或物に導く素質を持つ重要な心的錯亂の最初の状態に外ならないと言ふのだ、そして、例の私の母の家の場面で、ヴァシロフは自ら、自分の意志と感情との二元を妙な風に正直に打ち明けてゐた。然し私は繰り返して言ふ、その母の家の場面と、その聖像を二つに割つたことが、疑ふべくもなく、主として眞に「第二自我」のためであるとしても、尙私は、それ以來、そこには或種の復讐的象徴の要素が潜んでゐたのではないかといふ考に屢々捕へられ

る。復讐的象徴の要素でなければ、それはこれ等女性の期待に反する或憤恚、彼女等の権利と批評とに反する或憤慨といった風のものである。そのために彼は第二自我と一緒になつて、聖像を壊したのだ、恰も「君たちの期待が壊されること正にこの通りだよ」と言ふやうに。實際、たとひ第二自我が這入つてゐたにしても、それは主として單なる氣まぐれ……。然しかうは言ふものの、これは凡て單なる私一個の考で、確實なことを證明するのは難しいのである。

彼はカテリナ・ニコラエヴナを敬愛してゐたけれども、彼女の道德性には、根本的の、そして直劍な疑惑を抱いてゐた。それは確かである。

その時彼は屏の外で、彼女がラムバートの前で侮辱されてゐるのを見ながら、待つてゐたと私は信じる。然し、たとひ彼女が侮辱されるのを待つてゐたとしても、果して彼はそれを願つただらうか？ 繰り返して言ふ、私はたしかに、彼が願ひもせず、思ひさへもしなかつたことを信じる。彼は單に其處にゐて待つてゐただ、後から飛び出すために、何か言ふために、恐らく彼女を侮辱するために、或は恐らく彼女を殺すために……其處に起りさうな何をでもするために、然しながら彼はラムバートと共に這入つた時、どんな事が起るだらうなどは考へてもゐなかつたのだ。

附け加へて置くが拳銃はラムバートの彼にあつて彼自身は何等の武器を持つてゐなかつた。彼は、彼女の傲慢な威厳を見、殊に彼女を嚇すラムバートの惡黨振りに激怒して、躍り出したのだ。——そしてその瞬間に狂氣になつたのだ。果してその時彼は彼女を射殺しようと思つただらうか？ 私の考に依れ

ば、彼は自分で何をしつつかあるのかを知らなかつたのだけれども、然し若し吾々が彼の手を遮らなかつたならば、たしかに彼女を殺しただらうと思ふ。

彼の傷は致命的のものではないと證明された。それで治つたけれども、随分長い間床に就いてゐたと言ふまでもなく母の處で。

今、私はこの數行を五月の半ばに書いてゐる。微妙な春の晝で、窓は開け放されてゐるのだ。母はヴァシロフの傍に坐つてゐる。ヴァシロフは彼女の頬や髪をいぢりながら、優しい感情を漲らして顔を眺めてゐる。ああ、これは老ヴァシロフの半面に過ぎない、彼は今決して母の傍を離れない、そして二度と彼女を見棄てることはないだらう。彼は昔の記憶にあるマアカア・イワノウイツチのやうに（彼が例の商人の話をした時のやうに「涙の賜物」をさへ得てゐるのだ。

けれどもヴァシロフはまだまだ長生きをするだらうと思ふ。吾々と一緒にゐて、彼は全く善良で子供のやうに正直である。然し決して感覺の均衡だの自制だのを失つたこともなく、のべつに喋り出すこともない。そして彼の理想的方面はより著しくなつたけれども、智性と道徳性とは相變らず變化しないで保たれてゐる。正直に言ふことが出来るけれども、私は、現在のやうに、彼を愛したことは嘗てないのだ。然し惜しいことに、これ以上に彼のことを述べる時間もなく餘白もなくなつた。

けれども彼に關する最近の逸話（それは澤山ある）を一つ述べて置かう。

彼は四旬齋の頃には全く全癒してゐた。そして六週間には、精進をして、聖禮を受けようと言ひ出し

た。彼は三十年、或はそれ以上も洗禮を受けたことがなかつたのだ。母は喜んだ。皆は四旬齋の御馳走を、然し贅澤な美味しい料理を拵へに掛つた。私は隣りの部屋で、彼女が月曜と火曜に「新郎來る」といふ讚美歌を一人で歌つてゐるのを聞いた。彼はその文句にも調子にも嬉しがつてゐた。彼はその間中幾度も宗教に就いて立派なことを言つた。然し水曜日になつて突然精進がおしまひになつた。何かか不意に彼を苛立てた。その何かといふのは、彼が冗談に言つた言葉に従へば「面白い對照」であつた。即ち彼は、牧師の外形の中の、その零圍氣の中の或物を嫌つたのだ、それが何であらうとも、彼は歸つて來て優しい微笑を浮かべながら言つた。「僕は神を愛するよ。でもね、あれは嵌らないからね。」實はその日食事の時に焼肉を出したのだつた。

然し私は、今でも母が屢々彼の傍に坐つて、低い聲で、微笑みながら、抽象的な問題に就いて話し始めるのを知つてゐる。今、彼女は、いづれにして彼と愛人になつてゐるのだ。然しどうしてさうなつたか、私は知らない。彼女はヴァシロフの傍に座つて極つたやうに、ひそひそと話す。彼は笑ひながら耳を澄まして彼の髪を弄んだり、手に接吻したりする。そして、彼の顔には完全な幸福の光りが漂つてゐる。彼は時として殆んどヒステリーのやうな發作に襲はれる。すると彼女の肖像、例の夜接吻したあの肖像を取り出して、涙を零して眺める、接吻する、過去を思ひ出す、吾々皆を周圍に呼び集める。然しさうした場合には、彼は少ししか物を言はないのだ……。

カテリナ・ニコラエヴナを彼は全く忘れてしまつたらしかつた。そして一度も口にしなかつた。又母

との結婚といふことも少しも話されなかつた。皆は彼を夏になつて外國に連れて行かうと思つた。けれどもタチアナ・パヴロヴナはそれに烈しく反對したし、彼自身も行きたくなかつた。で、この夏を皆はベチルススグに近い或田舎の別荘で暮すだらうと思ふ。序ながら言ひ添へて置くが、吾々は皆矢張りタチアナ・パヴロヴナに費用を掛けてそれで暮してゐるのだ。

此處に一事を附け加へて置かう。——私はこの物語の中で、幾度も、ヴァシロフに關し、私自身平氣で、失禮な優越的態度を執つたことを、頗る遺憾に思つてゐる。が、自分で書いてゐる時には、その描寫してゐる個々の場合に、私自身を正にさう感じるのだつた。而も物語を終つて最後の行を書きながら私は突然、想起し記録するその過程に依つて、私が自分自身を教育し直したことを感じたのだ。私は自分で書いたことを、殊に或文章或頁の調子を非常に悔いる。然し一語をも消さうとは思はず、直さうとは思はない。

ヴァシロフがカテリナ・ニコラエヴナのことを一口も言はないことは今述べた。然し私は、彼の情熱が全然治癒したからだと思つてゐる。私も彼女に就いては、時に、それもこつそりと、タチアナ・パヴロヴナに話す位のものである。

カテリナ・ニコラエヴナは現在外國に行つてゐる。私は彼女の出發前に會つたし、數度の訪問をもした、外國に行つてからの手紙も二三通貰つてその返事もした。然し彼女の手紙に何が書かれてゐたか、又吾々が手紙で何を論じ合つたかに就いては、何も説明する氣はない。それは別の物語であり全然新しい

い物語である。そして恐らく未來のことである。唯、それには私がタチアナ・パヴロヴナにさへ洩らさない或事があつた。が、それで充分だ。一つ附け加へて置くならば、彼女は結婚してゐないのだ、そしてペリストシエフ家の者と一緒に旅を續けてゐるのだ。彼女の父、老公爵は亡くなつて、彼女は一番富裕な未亡人となつた。今は巴里に滞在しゐる。

彼女とピユリンとの破談は突飛に起つた。そしてそれは自然、極めて自然のことだつた。その顛末を述べて置かう。

その最後の恐ろしい光景の開かれる日の朝、例の痘痕の男は陰謀を首尾よくピユリンに知らせた。それはかういふわけだつた。ラムバートは相變らず共に事をするやうに痘痕の男を説かうと努めてゐたので、手紙を手に入れた時に、陰謀の全部を細大洩らさず、最後の瞬間に至るまで打ち開けたのだ。即ち、ヴァシロフガタチアナ・パヴロヴナを避ける詭計を發明した時にも、それを打ち開けたのだ。然るに他の連中よりも眼の見える、そしてその陰謀の可能性を先に察した痘痕の男は、最後の瞬間になつてラムバートを裏切つた。彼は粗野で性急なラムバートや、情火のために殆んど狂氣してゐるヴァシロフ等に依つてされた不可思議な計畫よりも、ピユリンの感謝の方を、より多く安全なものと考えた。このことは皆、後になつてトリシヤトフから聞いた。序だから言つて置くが、私はラムバートと痘痕の男との關係を少しも知らず、又、何故ラムバートが彼なしでは事が出来なかつたのかも解らない。更に私にとつてそれ以上に興味ある疑問は、何故ラムバートがヴァシロフを必要としたかといふことである。何故

なら彼はその時既に手紙を手に入れてゐてヴァシロフの援助などなくとも立派にやれたのだから。

この疑問は今になると、はつきり私に解る。即ちヴァシロフは前後の事情をよく知つてゐるから役に立つたのだ。否、そればかりでなく、ラムバートは、若し計謀が失敗するか或は偶然事の突發した場合、凡ての責をヴァシロフに轉嫁しようと思つてゐたのだ。且つ、ヴァシロフは金に目をつけてゐないのだから、彼にとつては、もつてこいの助手だつたのだ。

然しピュリンが應援に來た時は間に合はなかつた。即ち彼が一時間後に來て見ると、タチアナ・バゾロフナの處は光景が一變してゐた。ヴァシロフが鮮血に染みて床上に倒れてから五分もすると、ラムバートは、吾々が死んだとはかり思つてゐたラムバートが頭を擡げて立ち上つたのだ。彼は周圍をぎよるぎよると見廻して自分がどんな立場にゐるかを直ぐに見取つたので、物をも言はず、外套を掴み、一散に臺所から逃げ出した。そして永久に姿を見せなくなつた。

例の手紙は卓子の上に載つたまま死されてゐた。私は後になつて聞いたが、彼の負傷は大したものではなく、一寸氣分が悪くなつたといふ程度だつた。拳銃を射たれたので眼を廻して血が流れたので、それ以上の負傷ではなかつた。

その間にトリシャトフは醫者に斷けつけた。然しその醫者の來ない内に、ヴァシロフも甦つた。タチアナ・バゾロフナは、それよりもまだ前にカテリナ・ニコラエヅナを旨く正氣づかせて家に連れ歸つてゐたのだ。それでピュリンが吾々の處にやつて來た時、タチアナ・バゾロフナの處には、私と醫者とヴァシ

ロフと母としかゐらなかつた。母はトリシャトフが呼んで來たので、まだ身體の具合が悪かつたけれども心配の餘り我を忘れて飛んで來たのだつた。

ピュリンは喫驚して吾々を見廻した。けれどもカテリナ・ニコラエヅナが歸つたことを知るが早いか、吾々には一言の挨拶もせず、彼女を見舞ふために行つてしまつた。

彼は狼狽してゐた。彼ははつきりと、今は噂話になるのを殆んど避け得ないと思つた。けれどもこの事件は大した噂を生みはしなかつた。拳銃を射つたことを隠すことの出来なかつたのは事實だが、主なことは不明のまま葬られたのだ。調べた擧句に發見されたことの全部は、要するに、——五十歳に近い家庭のあるV某といふ戀に溺れた人間が、その心持を容れて呉れぬ、或立派な若い貴婦人に、自分の感情を打ち明けた。そして不意に狂氣して自殺した、といふだけのことであつた。これ以上のことは少しも世間に解らなかつた。そして新聞にさへもこの通りに書かれたきりで、姓名も單に頭文字が並べてあるに過ぎなかつた。

それにも係はずピュリンは喫驚した。それは尙悪いことに、彼は偶然、カテリナ・ニコラエヅナとヴァシロフとが大團圓の二日前に會見したことを聞き知つた。このことは彼を立腹させてしまつた、それで稍々不注意にも彼はカテリナ・ニコラエヅナに、そんなことがあつた次に、さうした異常な冒險が彼女の身に起り得たのは當り前だと言つて遣つた、カテリナ・ニコラエヅナは即座に彼に斷つた。別に怒りもせず、と言つて躊躇もせずに。彼のやうな人間と結婚しようといふ賢明な彼女の考は、煙のやうに消え失

せてしまつた。恐らく彼女は彼の全部を知つてゐたので、不意に突發した打撃が彼女の思想や感情の或物を一變してたのだらう。然しこの事に就いては二度と言葉を費すまい。ただ、ラムバートはモスコウに逃げて、行つて其處で何か苦勞してゐるといふ噂だ。トリシャトフにはその日以来會はない。尤も私は彼の行方を探してゐるのだ。彼は自分を射つた「大馬鹿」の友だちが死んだから消えてしまつた。

## 二

老公爵ニコライ・イワノヴィッチの亡くなつたことは既に述べた。この善良な、親切な老人は、その冒險の後、間もなく、けれども一ヶ月以上も床に就いてゐて、急に亡くなつたのだ。私は彼が私の宿にゐたその最後の日以来、二度と會ふ機會がなかつた。聞いたところに依ると、彼はその一月の間に以前よりも理性的になり、態度さへも、より優しくなつて、物に脅えず、涙も零さず、そしてアンナ・アンドレイヴナのことは一口も言はなかつた。彼の愛情は娘、即ちカテリナ・ニコラエヴナの身に集中され盡したのだつた。或時、それは死ぬる一週間も前だつたが、カテリナ・ニコラエヴナは、彼の氣なぐさみに私を呼んで見てはと言つてすすめた。然し彼は眉を擡めたのだ。私はこの事實を、何等の説明をも加へず記して置く。

彼が死んだ時、その所有地はよく整理されてゐることが解つた。そして彼は非常に多額の財産を残した。その財産の三分の一は、遺言に依つて、澤山の教女に分配された。然し、その遺言狀の中に、アンナ・ア

ンドレイヴナのことを少しも書いてなかつたことは、皆に頗る奇異な感じを抱かせた。彼女の名前は除かれてゐたのだ。

然し私の知つてゐる限りでは、老人はその死に先立つ數日前に、娘や友だちのベリスチエフやV公爵やを枕頭に集めて、もう死期が迫つてゐるからと言ふので、財産の内から六萬留だけをアン・ナアンドレイヴナのために取つておいてくれ、と、カテリナ・ニコラエヴナに命じたのだ。彼はこの希望を一言の説明もなしに、簡單明瞭に言つた。

それで、カテリナ・ニコラエヴナは、父親が亡くなつてから萬事が片づくくと、辯護士を通して、アンナ・アンドレイヴナに六萬留は貴女の思ひ通りになるのだといふことを通知した。然しアンナ・アンドレイヴナは素氣もなく、そして必要以上の言葉は用ゐないで、その金を拒絶した。このことは老公爵の希望だからと、百方留を盡したけれども彼女は聞かなかつた。その金は今でも矢張、彼女のためにとつてあつて、カテリナ・ニコラエヴナは何時か彼女の意志を嗣することが出来ようと當てにしてゐる。が、斷言し得るが、そんなことは起らないだらう、何故と言ふに、私は現在アンナ・アンドレイヴナの最も親密な友だちで、彼女の氣持をよく知つてゐるのである。

彼等が拒絶したことは世間をあつと言はせた。そして寄ると觸るとその噂が語られた。最初彼女と老公爵との結婚沙汰を耳にして氣を悪くしてゐた叔母のフアナオトフ夫人は、急に考を一變して、**二**が金を拒絶してからは、彼女が尊敬に價する女であることを證明した。然しこれに反して彼一の例の兄弟

は、遂にそのことで彼女と争つた。

私はよくアンナ・アンドレイヴナに會ひに出掛けるけれど、何でも彼でも親しく話し合ふとは言へない。例へば吾々は決して過去を話さないのだ。彼女は非常に喜んで私に會ふが、交されるのは大抵抽象的な話題である。その中でも彼女は僧院に這入るきつぱりとした決心をしたと話した。それも餘り前のことではない。けれども私は信じない、單に苦しみの表現だらうと考へてゐる。

然し本當に悲劇的な運命に見舞はれたのはリザだつた。これから少しリザの運命を述べなければならぬ。それは實際不幸だつた。彼女の苦しい身の上に比べれば、私の失敗の如き何だらう？ それはセルゲイ・ペトロウイチが、裁判の濟まない内に死んだことから始まる。彼はニコライ・イワノウイチ老公爵よりも先に死んだのだ。リザはまだ生れ出ぬ子供を抱いて世に取り残されなければならなかつた。彼女は涙も零さず、表面は冷靜だつた。靜かに、諦めをつけて、その昔の情火は消えてしまつたものやうに思はれた。彼女は優しく母の手助けをし、アンドレイ・ペトロウイチの負傷が治る間はその看護をしたが、非常に無口になつて、何ものをも氣に留めなからしがつた。恰も何にも自分には關係がない、自分はただ傍を通つてゐるきりだといふ風に。

ヴァシロフが稍々よくなるとリザはよく眠るやうになつた。で、私はよく本を持つて來てやつたが、彼女は少しも讀まなかつた、彼女は見るも痛々しい程瘦せて來た。私は時々慰めようと思つてその部屋に這入つて行つたが、敢てそれをしようとはしなかつた。否、彼女の前では近附くことも出來ず、何と

慰めていいか、その言葉が見附からなかつたのだ。

遂にある恐ろしいことが起つた。それまでは以上のやうな状態だつた。或恐ろしい事といふのは、――彼女は階段を迂り落ちたのだ。大して落ちたわけではない、せいぜい三段位も迂り落ちたのだつたが、その結果が流産となつて、それからの冬中病床に就かねばならなかつた。現在彼女は又歩けるやうになつたけれども、矢張り健康は優れず、普通の壯健な身體になるのは長い月日を要することだらうと思ふ。彼女は相變らず吾々と一緒に夢見るやうな無口な生活を送つてゐるが、母とだけは少しづつ話するやうになり出した。

この數日來、輝やかな晴々とした春の暖い日が續く、で、私は心の内で、昨年秋のよく晴れた朝、リザと私とが歡喜と希望とお互ひの愛とを胸に抱きながら街を歩いたことを思ひ出してゐる。ああ！然るにそれからどんなことが起つたことか？ 私はその愚痴を零さうとはしない、何故なら、私には新しい生活が始まつたから。けれども彼女には？ 彼女の未來は疑問である。そして私は今でも痛々しい氣持なくしては彼女を見ることが出來ないのである。

が、三週間ばかり前に、私はヴァシンの消息を話すことに依つて、彼女を喜ばすことが出來た。ヴァシンは遂に放免せられて現在では自由の身となつてゐるのだ。この聰明な男は（私は聞いたことであるが）最も精密な辯明と最も興味ある陳述とをして、彼の運命支配權を握つてゐる法官連に、彼の人格を釋明したのだつた。且つ、彼の名高い書類は、彼が或雜誌に寄稿しようと思つた佛蘭西語の翻譯に

過ぎないといふことが明らかになつた。彼は今×州にゐる。そして彼の義父ステベルコフは現在も同じ事件を以て牢内に監禁されてゐるが、聞くところに依ると、その事件は益々擴大になり複雑になつて行くとのことである。リザはそのヴァッシンの消息を妙な微笑を浮べて聞いたが、あの人がさうなるのは當然だといふことを言つた。然し彼女は、セルゲイ公爵の行ひがヴァッシンに悪い害を與へなかつたので明らかに嫉しがつてゐた。テルガシチエフ及びその一味の連中に就いては此處に述べる程のことがない。

これで物語は終つた。恐らく讀者の或者は知りたいと思はれるであらう、私の「思想」はどうなつたか？ 私があれ程に不思議な言ひ方をするところの、現在私に始まつてゐる新しい生活とは一體何か？ と。然しその新しい生活は、又私の前に開けてゐる新しい道は、以前と同じ私の「思想」なのである、但しその思想は、それとは認められない位に違つた形になつてゐる。が、この物語の中では、その問題に觸れないで置かう、それは全然違つた或物なのだから。私の過去の生活は滅び、新しい生活が正に始まつてゐる。

然し一つ最も大切なことを附け加へておく。——タチアナ・バヴロヴナ、私にとつての、本當の親しいタチアナ・バヴロヴナは、毎日のやうに、大學へ這入れと苦言して私を困らせてゐる。

「お前さんが學位を得てからは位置のことを考へることが出来るか、今のところは勉強をやり了へなきやいけませんよ。」と彼女は言ふのだ。實を言ふと私は彼女のすすめを考へ中であるが、いづれにも決定

出来ないのである。その故障の中でも特に私が困るのは、自分には現在勉強を續ける権利がないことである、何故なら現在私は母とリザとを養育するために働かなければならぬ義務があるのだから。然しタチアナ・バヴロヴナは、彼女の財産は私が大學にゐる間中、それを助けるに充分だからと言ふ。それで私はとうとう誰かに相談をして見ようと決心した。周囲を見廻して慎重なそして批評眼のある或人を探し當てた。即ちモスコウ時代の私の舊師で、例のマリ・イワノヴナの夫であるニコライ・セミオノウイチである。

私は何事に關しても他人の意見を要することは餘りなかつたが、この時は、この局外者の意見を溜らなく聞きたかつたのである。このニコライ・セミオノウイチは、どちらかと言へば冷酷な自己主義者だつたけれど、確かに明敏な人間に相違なかつた。私は、絶対秘密にして欲しい、殊にタチアナ・バヴロヴナに、何故と言ふに嘗て誰にも見せなかつたのだからと頼んで、彼にこの原稿全部を送つてやつた。二週間の後に、この原稿は、稍々長文の手紙と一緒に返つて來た。その手紙の中から、私は此處に少しばかり抜萃する。それには或共通の意見と、説明になるだらうと思はれる或物とが含まれてゐるから。以下がそれである。

三

「……アルカアデイ・マカロウイチ、君は、この自傳を書くことより、以上有効に、君の閑暇を費すこと

は出来なかつたらうと思ふ。君は言はば、君の最初の嵐、生活階段に於ける危険な時期を堂々と叙してゐる。私は、この記録に依つて君が、君の言葉に依れば「君自身を教育し直す」程度まで行くべきことを十分に信じてゐる。勿論、私は一言の批評をも敢てしないだらう。但しあらゆる頁が考へさせるものを持つてゐるけれども……例へば、例の手紙だ、それをあれ程久しく、あれ程執拗に持つてゐた事情といふものは——實に獨特のものである……尤もこれは百人中一人のみが認めることだらうと思ふ。又、私は、君の言葉を借りて言へば「君の思想の秘密」を私に、明らかに私一人に打ち明ける決心をした事實を、非常に喜ばしく思つてゐる。然しその「思想」に就いて私が批評すべきだといふ君の要求は、きつぱりと断らなければならぬ。その理由は、第一、手紙ですべきものではないから！ 第二、出鱈目の返答をするつもりがないからだ。私は尚よく考へておなければならぬ。ただ私は君の「思想」が獨創性を以て著しいといふことのみを注意しておきたい。然るに現代の青年はその大部分が、常に有り餘る、そして危険の源泉であるところの、出来合ひの思想に身を投じてゐるのだ。獨創的であるといふ一例を擧げるならば、兎に角君の思想は、當時、たしかに君よりも非獨創的であるところの、デルガツチエフその他の連中の思想から君を救つたのだ。最後に私はかの尊敬すべき婦人、タチアナ・パヴロヴナに絶對同意を表するつもりである。私は彼女を個人的に知つてゐるけれども、今日まで正當の評價をしてゐなかつたのだ。君が大學へ這入らねばいけないといふ彼女の計畫は、君のために何よりの利得であるに相違ない。勉學と生活とは疑ふべくもなく、三四年の間に、君の思想と熱望との視野を擴げるだらうと

思ふ。それで若し大學を了へて後も尙君の思想に返りたかつたならば、その時は、それを妨げる何物もない筈である。

一君は要しなかつたけれども、私が君の思ひ切つて正直な「自傳」を精讀してゐる間に心中に浮んだ印象を正直に述べることを許していただきたい。さうだ、私は、人間が君及び君の孤獨の青春に就いてよく懸念を感じ得るといふことを、アンドレイ・ペトローウィツチと共に同意する。そして君の如き青年は決して少くはなく、且つ本當に、其處にはひそやかな酒色の巷へか、或は放埒に對する潜める欲望へかの迷ひに導くところの、彼等の才能の危険が常にあるのだ。然しながら、この放埒に對する渴望は、實に屢々、恐らく規律と「らしくあること」(君の言葉を借りて言ふならば)とに對する渴望から生じ發することがある。

青年は青年である故に純潔である。恐らくこれ等狂氣の早熟な衝動の内には、規律を求める氣持、眞理を求める氣持が潜んでゐるのだ。それで、凡ての失敗は、今日の或青年たちが、その眞理とその規律とを、どうして信じ得るか想像も出来ないやうな實に馬鹿げた滑稽な事物の中に見てゐるから生じるのである。序に述べて置くが、最近の過去、多くても一時代前には、さうした興味ある青年が憐まれる程多くはなかつたのだ。何故といふに、當時に於ては彼等は殆んど常に首尾よく吾々の最も高い教養のある階級に接觸してその中に這入ることになつたからである。そしてたとひ彼等が先づ彼等自身の秩序と調和との缺乏、家庭の事情に於てさへ認められる貴族性の缺乏、祖先よりの傳習と社會生活の洗練され



完成された形式との缺乏、——さうした缺乏を認めたとしても、それは彼等にとつて利得だつたのだ。何故といふに、彼等は意識的にこの凡てに向つて努力し、又努力することに依つてそれを獲得することを知つたから。現在は立場が稍變つてゐる。何故なら青年が自らを接觸し得る物が殆んどないからである。

「私は比較を以て、或は言はば比喩を以て述べよう。若し私が露西亞の小説家だつたならば、又手腕を持つてゐたならば、たしかに作物の主人公を昔の貴族から選んだに相違ない。何故なら、その教養ある露西亞人の型にのみ、少くとも、小説に於て必要とするところの讀者に藝術的効果を與ふべき洗練された秩序と美學的美しさとの外形的な相似を見出すことが出来るからである。私自身は御承知の通り貴族ではないけれど、かう言ふのは決して冗談ではないのだ。プウシュキンは彼の未來の小説のための題材を、露西亞家庭の傳説」から選んだ。で、私がかう言ふのを信じて欲しい、吾々が持つてゐた美しきもの的一切はその中に發見されるのだ。何れにしても或種の完成を示した一切はその中に發見されるのだ。私がこれと言ふのは、私とその美の眞と正とを無條件的に認容するからではない、少くとも其處には、露西亞中で貴族以外には存在しなかつた義務と名譽との形が、而もその元形のままでさへ、完全に發見されるからだ。私は冷靜な人間として冷靜を求めつつかく言ふのだ。

「果してその名譽が善いものか、その義務が信實のものか、——それは第二の問題である。私の心にとつて最も重大なことは、上部から規定されたのでなく、内部から發達したところの、その形式と或秩序

の存在との究極である。ああ吾々にとつて何よりも重大なことは如何なるものにもせよ吾々自身の秩序なのだ！ 未來に對する希望の全部は遂に樹立された或物を持つことにある、決してこの絶えざる破壊にはなく、四散する破片にはなく、二百年に亘つて何物にも導かない確據と不秩序とにはないのだ。

「ストラヴ最負だといふので私を驚かさないで呉れ給へ。私はただこれを厭人性から言ふのだ、何故といふに私の心は驚愕だから。今日、そして最近の過去に於て、私が以上を想像したこととは正反對のことが起つてゐる。それは社會の最上層への彼等自身の歸らない降着ではない、その反對で、氣輕な情しさを以て、洗練された高貴なものから裂かれた断片が、圓になつて不規律と嫉妬とになつてゐることである。そして其處には、教養ある家庭だつて家庭の父親や家長が、その子供への信じたがづつてゐるものを笑つてゐるといふやうな例が幾つもある。そればかりではない、彼等は致々としてその子供たちに、不正直たらうとする突然の放埒に際して、その難儀すべき快樂を見せびらかすのだ。親しきアルカアディ・マカロウイツチ、但し私は眞の意味の進歩主義者に就いて言つてゐるのではない。ただ多數あるだらうと思へる場合の連中に就いて言つてゐるのだ。それで私を信じて貰ひたいが、吾々の中には私が想像したやうな、さうした眞の自由主義者、人類の眞の、貴い友も必ず多いのだ。

「然してこんなことは凡て理屈に落ちたもの。私は先刻の假定した小説家に引き返すでしょう。この場合に於ける吾々小説家の立場は完全に決定されるだらう。彼は歴史以外の如何なる形をも書くことは出来ない。何故といふに今日の世には立派な型がないからである。そして若しその殘存してゐるものがあ

るとしても、時代を支配してゐる思想に動かされて、その美を保つてはゐないだらう。ああ！だから歴史的形式の内には、極めて魅力のある、そして慰藉のある詳細を描くことが出来るのだ。讀者がその歴史的作物を可能な、そして實在するものと間違ふ程に讀者の眼を迷はすことが出来るのだ。さうした作物が、若し大手腕を以て作られるならば、それは、露西亞文學に、と言ふよりも、より多く露西亞歴史に屬するであらう。

「それは露西亞人の理想を具體化した藝術的作物で、餘りに久しく眞の存在を保つてゐるので、それが理想だつたとは想像されないであらう。教養ある上流階級に屬する露西亞人の家庭の作物に描かれた主人公の子孫は厭人的の孤獨な、著しく憂鬱な様子にしか描かれだらう。彼は讀者に依つて活動の答から退きつつある者と一見して認められ、且つ彼に残された活動の答はないのだと思はれるやうな、變な人間に見えないではゐないのだ。更に時が経つと、その主人公の子孫である厭人的な人間も全く消えてしまふ。そして新しい性格、善々にはまだ解らない性格が現れるだらう。新しい理想が現れるだらう。然しそれはどんな性格か？ 若しそれに美がなかつたならば、未來に於て露西亞の小説は不可能となるのだ。然し、單に小説のみが不可能となるのだらうか？

「この問題はこれ以上追はうとは思はない。然し急いで君の原稿に引き返すとしよう。一例を舉げてヴァシロフ君の二つの家庭を考へて見給へ。私はアンドレイ・ペトロウイツチその人のことを餘り述べようとは思はないが、兎に角彼は立派な古い家系を持つた人で、眞の詩人であり、そして露西亞を愛して

はゐるが、而もそれを絶対に拒んでゐる。彼は如何なる宗教をも持たないであらうけれど、漠然とした或物、明瞭な名を下すことは出来ないが熱心に信奉してゐる或物のためならば、殆んど死ぬる覺悟をしてゐるのだ。恰も露西亞史上のペテルスブルグ時代に西歐文明を盲信した一群の露西亞人のやうな熱心を以て、彼はその或物を信じてゐる。然し彼のことはこれで澤山だ。そこで彼の正系の家庭に移るが、私は彼の嫡子を論じようとは思はない。そして實際彼は名譽に價しない人間だ。罪證を具へてゐる者なら誰でも彼のやうな成上り者が何を露西亞に入れ込むか、どんなに他人をも同じやうにするかを知つてゐるのだ。それから娘のアンナ・アンドレイヴナだが、これはたしかに強い性格の女性ではないか。何も罪のあることを豫想するつもりはないけれど、それは私には不似合な役だから、母のミトロフアニア尼僧に一寸似た人物だと思ふ。

「アルカアデイ・マカロウイツチ、若し君その家庭を例外的現象であると言つて呉れることが出来るならば、私は喜ばしく思ふ。然し、反對に、多くの露西亞貴族の家庭が、不可抗的な勢力を以て、共に例外的家庭に化し、それと一緒に不規律と混沌との中に交りつつある、といふ方が實際の結論ではないだらうか。さうした例外的家庭の一例が君の原稿に寫されてゐる。さうだ、アルカアデイ・マカロウイツチ。君は貴族的型とは反對の、例外的家庭の一例なのだ、貴族的型の人間は君とは非常に相違した少年期及び青年期を闊して來てゐるのだ。

「私は言はなければならぬ、例外的家庭から主人公の來てゐるやうな作を書く小説家にはなりたくない

ものであると。……  
 「彼を描くことは不快な仕事であり、何等の美を持つことも出来ないのだ。且つこれ等の型は如何なる場合にも一時的だ、従つてそれ等の型を書いた小説は藝術的に完成される筈はない。讀者は大きな誤解や、誇張やをするだらう。如何なる場合にも餘りに多くの臆測をしなければならぬだらう。然し、歴史的形式にしようと思はず、現在に對する渴望に憑かれてゐる作者をどうすることが出来ようか？」  
 「然し君のやうな自傳は未來の藝術のため、既に過ぎ去つた不規律な時代を描く未來藝術のためには、その材料として役に立つかも知れない。喧ましい争鬭の時代が過ぎて、そして未來が来る、と、未來の藝術家は、過去の不規律と混沌とを描いて美の形式を発見するだらう。その時、君のやうな自傳は——それが眞面目なものである限り——混沌として突飛なものではあるけれども役に立ち材料を供給することになるのだ、……これ等の作物は兎に角或眞實の特性を何時までも持つてゐるので、それに依つて人はその厄介な時代の生意氣盛りの青年の心中にどんな事が潜んでゐたらうかを想像することが出来るだらう。——生意氣盛りの青年が時代を作つてゐる以上、それを知ることが決して無價値なことではないのだ。」

大正十年六月五日印刷  
大正十年六月十日發行

不許  
複製

非賣品

|        |           |   |
|--------|-----------|---|
| 編輯兼發行人 | 植村 宋 一    | 東京市日本橋區本町二丁目八番地                             |
| 印刷者    | 宮田 龜 六    | 東京市神田區西小川町二丁目六番地                            |
| 印刷所    | 大成 社      | 東京市神田區西小川町二丁目六番地                            |
| 發行所    | 株式會社 冬夏 社 | 東京市日本橋區本町二丁目八番地<br>電話 東京四五四四六<br>電話 本局三一 一二 |

集全一キスフエイトズド  
卷一十第

大正十年六月五日印刷  
大正十年六月十日發行

不許  
複製

編輯兼發行人

植

村 宋

一

印刷者

宮

田 龜

六

印刷所

大

成

社

發行所

東京市日本橋區  
本町二ノ八區

株式會社

冬夏社

社

電話東京四五四四六  
電話本局三一〇二

東京市神田區小川町二丁目六番地

東京市神田區小川町二丁目六番地

東京市日本橋區本町二丁目八番地

非賣品

集全一キスフエイトズド

大正十年六月十日發行

非賣品

375  
47

終

